１　病　第　１　３　号
平成２１年１０月５日

各関係機関長・団体長様

京都府病害虫防除所長
（　公　印　省　略　）

病害虫発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので、送付します。

◇

発生予察特殊報第１号

１　病害虫名　　イチジクヒトリモドキ　*Asota ficus* (Fabricius)

２　発生作物　　イチジク

３　発生地域　　城陽市

４　発生経過

平成２１年９月、イチジクの露地ほ場でイチジクヒトリモドキと思われるチョウ目幼虫が発生しており、葉を食害しているとの連絡があった。採集した幼虫について、すでに発生の報告があった大阪府の病害虫防除所に同定を依頼したところ、本種であることが確認された。イチジクヒトリモドキの発生は、国内では１３府県で報告があるが、本府では初確認である。

５　形態

卵は淡黄色で直径約0.8mmのまんじゅう型をしており、葉裏に数十個の卵塊として産み付けられる。

若齢～中齢幼虫（図１）は頭部は黒色、胴部背面が全体に白っぽく、体の側面は橙色である。

終齢幼虫（図２）は体長約40mmで、頭部はつやのある黒色、胴部背面は灰色がかった黒色で、腹面は橙黄色を呈する。刺毛基部は橙黄色で、刺毛基部からは白く長い刺毛が１本ずつ生える。

成虫は、開帳50～70mmで前翅が淡褐色の地色に橙黄色、黒色、白色の斑紋、後翅は黄色の地色に黒色の斑紋を有する蛾である。

６　生態

本種はヤガ科ヒトリモドキガ亜科に属する南方系の蛾である。幼虫の寄主植物としては、クワ科イチジク属のイチジク、イヌビワ、オオイタビ等が報告されている。若齢～中齢幼虫（体長約20mmまで）は集合性が強く主に葉裏に群生して食害するが、成育が進

むにつれて分散し葉表にも生息するようになり、太い葉脈を残し葉のほとんどを食いつくす。幼虫は老熟すると樹を降り、土中の浅いところで土繭を作って蛹（図３）で越冬し、年間４世代を経過すると推定されている。

7　被害の特徴

若齢では葉裏から表皮を残して食害するため、葉脈間に白い膜が残る。中齢～終齢幼虫になると太い葉脈を残し葉のほとんどを食い尽くすため、葉がうちわの骨のようになる（図４）。また、葉が少なくなると果皮も食害する。

8　防除対策

（１）耕種的な防除として、イチジクでは若齢幼虫が葉裏に群生する時期に寄生葉を取り除いて処分する。

（２）発生初期に、モスピラン水溶剤　2,000倍（収穫前日、３回以内）、アディオン乳剤　3,000倍（収穫前日、２回以内）を散布する。

＊登録内容は平成２１年１０月５日現在

図１　中齢幼虫

図２　終齢幼虫

図３　蛹（室内飼育）

図４　イチジクの被害状況